

清水新書 017

王羲之◎六朝貴族の世界

吉川忠夫



よしかわただお
吉川忠夫

一九三七（昭和一二）年京都に生まれる。京都大学大学院文学研究科博士課程を修了。東海大学文学部講師を経て、現在、京都大学人文科学研究所助教授。主著書に『劉裕』『侯景の乱始末記』などがある。

清水新書 017

王羲之 六朝貴族の世界

昭和五九年九月二五日 第一刷発行 ©

定価 四八〇円

著者 吉川忠夫

発行者 野村久也

発行所 清水書院

一六二 東京都新宿区東五軒町一―二

電話 〇三―二六〇―五二六一―六

振替 東京三―五二八三

印刷所 (株)トータルブック

ISBN4-389-44017-9



清水新書 017

王羲之 六朝貴族の世界

吉川忠夫

本書は「人と歴史」シリーズ（編集委員 小葉田淳、沼田次郎、井上智勇、堀米庸三、田村実造、護雅夫）の「王義之」として、昭和四七年に刊行したものです。

まえがき

「六朝の書、唐の詩、宋の画」ということばがある。説明するまでもなく、中国数千年の歴史のなかで六朝、唐、宋それぞれの時代を代表する芸術をあげたことばだが、六朝時代を代表する芸術としてあげられた書、その六朝の書の第一人者に王羲之をおすことはだれしも異論のないところであらう。王羲之は俗に「書聖」——書の世界における聖人——とよばれる。王羲之を「書聖」とよぶのがいつにはじまるか、いまだ明らかにしえない。ただ王羲之にややさきだつ葛洪は、人間のあらゆるいとなみにおける第一人者を聖人とよぶべきだと主張し、書の達人を「書聖」とよんでいる。もし葛洪が王羲之よりおそく生まれた人なら、「書聖」としてきつと王羲之の名をあげたことであろう。そのことはともかく、人間のあらゆるいとなみに価値をみいだそうとするこの葛洪の発言のもつ意味は重い。「書聖」とならんで、囲碁の名人は「碁聖」とよび、すぐれた戦略家は「用兵の聖」とよぶべきだとかれはいっている。六朝に先行する漢代において、聖人といえばまずまちがひなく為政者たる聖天子、いわゆる「治世の聖人」をさした。ところが漢帝国の崩壊は、同時に政治第一主義の社会体制の崩壊でもあった。その結果、政治だけではなく、人間のいとなみの多様なありかたに注目すべきではないか、そのように六朝の人たちは考えるにいたった。そしてここに芸術

の生まれる場がはじめて成立した。問題を書にかぎっていえば、すぐれた造形性を本来的にそなえた漢字、それはいつか美意識の対象にのぼるべきものであったが、漢字の美を発見し、芸術としての書を確立したのは実に六朝人であったといつてよい。芸術の成立は、制作者の問題であるとともに、つねに鑑賞者の問題でもある。

ところで本書は、「書聖」とよばれる王羲之の書そのものを取りあげて多くかたることはないであろう。そもそも至高の芸術はことばによる解説を必要とするであろうか。莊周は「意を得ては言を忘る」といつている。維摩居士は不二の法門に入ることのなんたるかを問われて、ただ黙するのみであった。芭蕉は松島について、「造化の天工、いずれの人か筆をふるひ詞を尽さむ」といった。それにもにて、至高の芸術は言表のかなたの存在なのではないか。王羲之の書そのものについては、読者みずからかれの作品にあいたいしていただくのがもつともよいと考える。本書は王羲之のひととなり、生活、思想、信仰、およびかれの生きた時代についてもつばらかたるであろう。書家王羲之よりも、むしろ王羲之を通して、四世紀の中国を生きた一知識人の全体的なすがたを描きたいと思う。書の制作は王羲之の生活のすべてではなかった。大伴家持^{おとろのやかもち}にとって歌を作ることがかれの生活のすべてではなかった、といわれるのとあたかも同様である（山本健吉「大伴家持」）。王羲之はなによりも一個の貴族であり、貴族として当然に政治にたずさわり、貴族にふさわしい教養の所有者であり、かかる教養のひとつとしてかれの書はあった。それらの点が明らかになれば、かれの書に

たいする理解もきつとふかまるであろうと信ずる。

執筆にあたつてよりどころとしたのは、まず第一に「晋書」であり、その卷八〇は王羲之伝にあてられている。また五世紀に編纂された名士逸話集「世說新語」。また羲之みずからの詩文、ことにかれの尺牘（書簡）である。さらに唐の張彦遠の編纂にかかる書論「法書要録」である。そのほか近人の著述は卷末にあげておいた。なおはじめにことわっておかねばならぬのは、王羲之の正確な生卒年が不明なことであり、その点については清の魯一同の「王右軍年譜」の説、三〇七年（永嘉元）——三六五年（興寧三）、にしたがった。尺牘の繫年その他にかんしても右書におしえられたところが多すぎる。



目次

まえがき.....	三
序 六朝という時代 政治・社会の混沌と多彩な文化.....	一三
貴族主義の時代 多彩な六朝文化	
I 王羲之の書の探索 賺蘭亭.....	一八
プロローグ 羲之の書の流传 太宗の執念 だましとられた 「蘭亭序」 ことの真相 「晋書」王羲之伝	
II けわしき世相——王羲之とその時代 蘭亭序.....	三六
千岩万壑 会稽名士列伝 蘭亭の会 死生もまた大なり 「蘭亭序」偽作説 「蘭亭序」ははたしてにせものか 会稽内史	



III

喪乱帖……………六八

混迷をきわめる華北 江南の囚われびと 殷浩の登場 殷浩
と桓温のさやあて 殷浩の北伐 殷浩をいさめる 咄咄怪事

誓墓文……………九二

王述との衝突 官界をしりぞく ひとふりの太刀 王と馬と
天下を共にす 一門のホープ 王敦そむく 結婚と仕官

王略帖……………一二六

四郊多壘 洛陽の奪還なる 北部戦線 放棄された洛陽
謝安の出馬

いかに生きるべきか

——王羲之の生活・信仰・思想・芸術

逸民帖……………一三六

かずかずのエピソード くるしからざる隠遁 七男一女 郝
家の人々 羲之の尺牘 目前のたのしみ 生と死

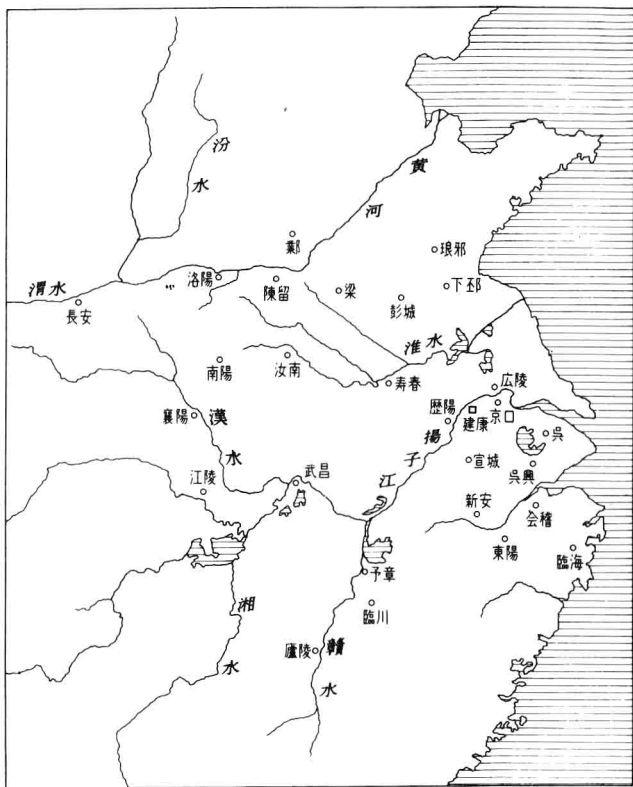
黄庭経……………一六三

道士許邁 太平道と天師道 抱朴子と茅山派 服食養生



目に寓まるもの理はおのずから陳なる
然と工夫 エピソード
造化の機をぬすむ 天

あとがき	一九七
年 譜	一九九
参考文献	二〇三



王羲之の本籍地は琅邪。建康（現在の南京）で育ち、建康・臨川・武昌・会稽の諸地で官僚生活をすごした。そのご会稽で逸民生活に入り、そこで果てた。4世紀の人である。



序

六朝という時代



政治・社会の混迷と多彩な文化

貴族主義の時代

三世紀のはじめ、後漢王朝が滅びると、華北を制覇した魏王朝、現在の四川省を中心にして建国した蜀王朝、および江南に建国した呉王朝、この三王朝が鼎立する三国時代をむかえた。三国時代から六世紀末の隋王朝にいたる時代、いわゆる六朝時代は、政治的にも社会的にも、まことに混迷をきわめた時代であった。そもそも六朝時代には、中国全土の統一に成功した王朝といえ、三国の対立にピリオドを打った西晋王朝を唯一の例外として、ほかには存在しない。唯一の例外である西晋王朝とて、半世紀のちには、胡族の活動が活発になったため、江南へ逃亡せざるをえなくなった。江南に逃亡した晋王朝、いわゆる東晋王朝、および東晋をおそった宋・齊・梁・陳の四王朝と、華北に興亡をくりかえす胡族系の諸王朝とは、三世紀半以上にもおよぶ長期間にわたってにらみあいをつづけた。

六朝時代の政治や社会を左右したのは貴族であった。おおむね後漢時代の各地方の名望家に由来する門閥貴族であった。この時代が「貴族の時代」とよばれるのはそのためである。貴族はおしなべて「士」の階層に属し、一般の「庶民」とのあいだには、「士庶のけじめは天隔す」ということ

ばが示すとおり、こえることのできない一線が画されていた。とりわけ士族には、土木工事や軍需品輸送などの徭役ようえきがいっさい免除される特典があたえられていた。ただ、貴族といっても、ぴんからきりまで、実にさまざまのランクが存在する。東晋以後に例をとつていうと、筆頭に位するのは、晋室の南遷と行動をとにした北方からの流寓貴族りゅうよくであった。なかでも王氏わうしと謝氏しやの二門閥が第一級であった。そしてふしぎなことに、江南出身の貴族は二流と考えられた。さらに下層には、地域社会に顔はきいても中央政界とは縁のうすい豪族ないしは土豪が存在した。このように、上をおおげばいくらでも上があり、下をのぞめばいくらでも下のある社会、それが貴族社会であるが、このランクを決定したのは、貴族なかまで形成される輿論よろん、いわゆる「清議せいぎ」であった。そして貴族たちは、それぞれのランクにあい応じて、ほぼ自動的に一定の官職に就任することができた。九品官人法きゅうひんかんぽうとか九品中正法きゅうひんちゅうせうぽうとかよばれる官吏任用制度によってである。

この制度は、三国の魏が創業された二二〇年にはじまり、隋王朝にいたるまで、六朝の諸王朝にうけつがれたが、その内容はつぎのようなものであった。すなわち、各州郡に一人の中正ちゅうせいをおき、州郡内の人物について品評をおこなわせる。中正の品評は一品から九品にいたる九等にわかれ、郷品きやうひんとよばれる。中央政府では、郷品にもとづいて、これまた一品から九品の九等にわかれた官職のいずれかに叙任する。そのさい、郷品から四品さがる官品をあたえるならわしがあった。たとえば、郷品一品なら五品官に、郷品二品なら六品官に叙任されたのである。ところが、各州郡に一人の中

正では、すべての人物についていちいち資格審査をおこなったうゑ郷品をあたえることは至難のわざであろう。そのため、中正が郷品をあたえるにあたつて参考としたのは、さきにのべた清議であつた。つまり九品官人法では、清議が郷品を決定し、郷品が官品を決定する関係が成立していたのであり、けつきよく、門地のたかさにあい応じて一定の官職に叙任されたのである。

六朝時代にあつては、官吏の任用にかぎらず、一事が万事、「はじめに清議あり」であり、天子でさえ清議にたいして口だしすることはいっさいできなかった。たとえばつぎのような逸話がある。宋の文帝（ぶんてい）のとき、寵臣（ちゆうしん）のなかに王弘（わうこう）というなりあがりものがいた。ある日、文帝がいった。「おまえは貴族のなかまいりをするを日ごろから念願としているが、王球（わうきゅう）の家にでかけたうゑ、着席がゆるされるかどうかできまるであらう。王球のところに行つたら、勅命をちようだいしているといつて、さつさと腰かけるのだ」。王球は一流中の一流の名門であるが、さて王弘がやってきて腰をかけようとする、王球は扇をかざしつつ、「ならぬ」とのひとこと。王弘はなすすべもなくひきあげてきた。文帝は、「朕（ちん）とでもいかんともすることはできぬのだ」とためいきをもらした。この逸話を一例として、王朝権力はたえず貴族勢力におかされがちであつた。天子の廃立が日常茶飯事のごとくおこなわれ、王朝の交替がひんぴんとしてくりかえされたのは、貴族の意向によるところがおおきかつた。貴族としては、ただ貴族社会のルールを承認し、自分たちの権利と安全を保証してくれる天子であり、王朝でありさえすればよかつたのである。自分たちにとってより都合のよい

天子をもとめて廢立がおこなわれ、王朝革命がくりかえされたのであって、それによってわがみの傷つくことはまったくなかった。

多彩な六朝文化

かかる政治的、社会的な混迷は、文化の沈滞をもたらしたであろうか。その点にかんしては、事情は予想をうらぎってそうでない。文化のにないては、やはり貴族であり、文化は貴族の占有物であつたけれども、六朝の文化ははなはだ異彩をはなつた。六朝に先行する漢代の文化は、ひとくちにいうと儒教文化と表現することができるといふ。とりわけ、前漢の武帝が儒教を表章していらい、あらゆる文化現象は儒教に従属させられた、といつてよい。儒教はきわめて政治的性格にとむから、文化が政治に従属させられた、といいかえてもよい。しかるに六朝時代になると、それまで儒教に従属させられていたもろの文化現象が、それぞれ独自の存在たることを要求し、獲得する。「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり」といったのは魏の文帝、曹丕であつたが、それは文学の政治からの独立を宣言することばであつた。史学についても同様であり、また玄学の名のもとに、老莊思想と『易』の哲学をミックスした形而上学がおこつた。あるいはまた仏教や道教などの宗教が盛行し、人間の生や死、あるいは人間存在そのものについての思索がふかめられた。さらにはまた書画をはじめとする諸芸術が、勸善懲惡的な倫理から解放され、それ自体の美が追求されるようになった。魯迅は六朝を「Art for art's sakeの時代」